

ポスト・ヒバクシャについて皆さんで考えよう!

「非核運動と生成AIのコラボ」

今年は長崎・広島に原爆が投下されて80年。非核運動が直面する大きな問題のひとつは、これまで運動の中心的存在になってきた被爆者の絶対的な減少と高齢化です。

われわれ世界平和ページントの活動を振り返ってみても、被爆者なしの平和運動は考えられません。世界平和ページントは15年前に発足しましたが、そのきっかけになったのは被爆者、据石和江さん(当時、82歳)の講演会でした。カズさんの愛称で親しまれていた据石さんが、米カリフォルニア州のUCアーバイン校の大学生を相手に、被爆の惨状を伝えるパネル写真を手にして「ノーモア広島、ノーモア長崎」と訴える姿の前に、それまで知悉していたはずの原爆像がことごとく崩れ去り、打って変わった新たな原爆像に全身全霊が洗礼される思いでした。それまで国際ジャーナリストと呼ばれることを甘受してきた我が身を恥じずにはいませんでした。自国に投下された原爆の実相について何も知らなかったのだ---と。今から思えば、それは絶対悪としての原爆を認知した瞬間でした。隣の席の妻の目にも涙が溢れていました。壇上を去ろうとするカズさんに早速話しかけたところ、即座に「O K、一緒にやりましょう」との返答が返ってきたのです。

その年、芥川賞作家で在米の平和運動家としても知られる米谷ふみ子さんの協力を得て、カズさんにとっても初めての野外討論会(原爆投下肯定論者の多いアメリカではかなりの勇気を必要とする)を開催することになりました。会場となった市民公園では、その場にいたアメリカ人も輪に加わり、予想以上に反響は大きく、以降の活動の励みとなりました。しかし、年毎に体調を崩していったカズさんは2017年他界され、代わって、カナダ在住のランメル幸さん(87)に貴重な被爆体験を語り継いでいただくことになりました。

いずれにせよ、今後被爆者のいない非核運動をどう展開していくかが喫緊の課題となってきました。世界平和ページントでは、恒例の広島市長メッセージの前に必ず複数の被爆者証言を紹介していますが、さらに抜本的な対策を考えなければなりません。そのひとつのソリューションとして浮上しているのは、タイトルにあげた「非核運動と生成AIのコラボ」です。生成AIが時空を超えてどこまで被爆者の声を代弁できるか、本年の世界平和ページントではさまざまな運用例を広く視聴者に問いかけ、世界平和ページントの新たなプラットフォーム構築に導入したいと思っています。その具体的な成果は改めてご報告させていただく所存です。

2024年8月4日(広島原爆投下前日 於ロサンゼルス)
世界平和ページント代表、木村正弘